NARASIA | REPORT〈第十八回〉

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

AOKI Takeshi
青木健

21 長安（西安）・その2

今号では、前号に引き続き、２０１７年８月と２０１９年７月の２回の西安訪問の経験を中心として、陝西省・甘粛省におけるイラン文化の痕跡を探りたい。もとより敦煌まではイラン文化が花咲ける土地柄であったが、ここを境にイラン文化は凋落し、漢民族文化が絶対不可侵の優越性を持つ。この漢民族の絶対領域でイラン文化の痕跡を探るのは、荊棘の道であった。

＊　＊　＊

21-1. 西安の舞踏

前号末尾では、中東料理と中華料理の混成体たる西安の「中華ハラール料理」を取り上げ、以て現代中国に生きるイラン文化の一斑とした。今号冒頭では、西安の舞踏文化を紹介し、そのイラン文化活用を論じたい。

２０１９年７月の西安訪問の折は、西安賓館前の唐楽宮にて、唐代宮廷料理と唐代舞踊を楽しむ機会を得た。これは盛唐（７１２年〜７６５年）の宮廷舞踊を再現した（と称する）もので、果たしてそんな往古の舞楽が完璧な形で伝承されているものかと云う疑念は拭えなかったものの、清代（１６４４年〜１９１２年）に北京で発達した京劇とは全く異なる舞台と衣装と乱舞を楽しむことが出来た。特に、唐代の衣装の煌びやかなこと、敦煌風の踊りの華やかなことに目を奪われた。絵画で見る胡旋舞に似ているので、少なくとも「ソグド舞踊」のイメージが下敷きにあるのだろう。

ただ、このディナーショー、３００人くらい観客が居たのだが、半分は欧米人観光客で、日本人は（おそらく）筆者だけだった。２０１９年時点での西安観光の主力は、完全に日本人から欧米人へ移行したようである。歌劇のモチーフは則天武后で、史実を踏まえた人間なら、中国語は分からなくとも意味は掴めたものの、欧米人には意味不明だったのではあるまいか。西安の主要産業は、軍需産業・教育産業・観光産業だそうだが、欧米人向けの観光コンテンツとしては、かなりの解説が必要なように思われた。

尤も、これは気楽な外国人観光客の意見である。西安の現地人の意見では、先ずは商売として成立させるのが最優先で、過当競争の中国社会では生き残るだけで精一杯と聞いた。筆者が「日本だって競争社会ですよ」と反論すると、「日本はルールあっての競争だけど、中国は完全な無法状態での競争よ。しかも喰うか喰われるかよ」との返事だった。そうだとしたら、確かに欧米観光客向けに特化して、史実の理解などよりも舞台上の華やかさを追求する方が正解なのかも知れぬ。

それにつけても残念なのは、これを史実として理解し得る（であろう）日本人観光客の激減である。２０１９年現在では、中国の小学生や中学生の修学旅行先は日本が主流で、「中国 ⇓ 日本」旅行の流れは完全に定着したそうである。しかも、行き先は、「東京の清掃工場、普通の中学校、お台場の未来博物館、ディズニーランド、富士山、京都の金閣寺、漫画村、大阪城」のコースが定番らしく、中国の小中学生は日本文化に物凄く詳しい。これに対して、「日本 ⇓ 中国」旅行の流れは全盛期の１割にまで落ち込み、奇妙な非対称をなしている。日本人の中国認識にとっても、中国人が提供する外国人向けサービスにとっても、負の連鎖が起こっているような気がする。

ここで、イラン研究者としてもう少し切り込んで、西安市や甘粛省が如何にイラン風・西域風文化を活用しているかについて調べてみた。すると、中国人は何事も組織的であって、このような文化遺産を保護し、しかも観光に結び付ける努力を国家レベルで怠っていなかった。筆者のような外国人からすれば、このように問題に機動的に対処できる点こそ、一党独裁体制の強みであり、現代中国の共産党支配は「開発独裁」に分類されるパターンかと感銘を受けそうになった。

即ち、中国―少なくとも陝西省や甘粛省―の何が組織的かと云えば、下記の如き研究機関を設立して、産学官で「文化」と「観光」の融合を図り、沿岸地域に比べて格段に立ち遅れている内陸部の内需振興を狙っているのである。

・西北師範大学蘭州キャンパス観光学部
・西北師範大学敦煌キャンパス観光学部

この中に、シルクロード観光学科や舞踏学科があると聞く。「敦煌キャンパス」で「シルクロード観光」の為の「舞踏学科」などと言われれば、これはもう学生たちが集団で胡旋舞を踊って、文化遺産を保護すると共に

外国人観光客を惹き付けているとしか思えぬ。今のところ、これが成功事例なのか失敗事例なのか分からぬが、日本人研究者として見学させて頂く価値はあるだろう。

因みに、筆者がこのような感懐に耽っていると、西安出身の同僚から「開発独裁」説を即座に否定された。中国は共産党の「お陰で」発展した訳では無く、共産党支配「にもかかわらず」発展していると解した方が正解とのこと。例えば、筆者が頻りに、中国の高速鉄道や高速道路などの建設スピードを褒め称えると、同僚は「それは社会保障を一切切り捨てた上でのことです」と反論した。中国は「共産主義社会」を標榜するにも拘らず、社会保障が恐ろしく遅れており、特に中国の人口の半分を占める農村部は事実上無年金状態と聞いた。また、教育予算も確保できず、殆どの予算は、軍備増強、鉄道建設、道路建設に振り向けられている。そして、地方に赴任して鉄道と道路をたくさん造った共産党幹部が中央で引き立てられるので、加速度的に誰も使わない不採算道路が乱立しているとの説明であった。

――どうも、中国を訪問する度に、中国の専門家ならざる筆者は無邪気に感動してしまい、それを口にしては、中国人の同僚から冷水を浴びせられている気がする。村田清風（１７８３年～１８５５年）の狂歌「来て見れば　聞くより低し　富士の山　釈迦や孔子も　かくやありけん」そのままである。

21-2．西安の乾陵

２０１９年７月の西安訪問の一日、筆者は、西安から西北へ70キロ地点にある唐朝第３代皇帝高宗（在位６４９年～６８３年）と則天武后（在位６９０年～７０５年）の合葬墓である乾陵を訪問した。言うまでもなく、サーサーン朝ペルシア帝国（２２４年～６５１年）が崩壊し、イラン貴族が雲霞の如く長安へ亡命してきた時代の皇帝墓陵であり、当時のイラン人ゾロアスター教徒たちもこれを眼にしていたのではあるまいかと考えての訪問である。多分、一般的日本人の乾陵に対する興味の持ち方とは、かなり隔たっているだろうが。

筆者としては、そもそも皇帝の墓が首都から70キロという地理感覚に驚いたし、山麓から神道を通って陵に詣でるまでの道程が10キロで、これには辟易した。試みに平城京からの直線距離を調べたら、三重県鈴鹿市が74キロ、滋賀県彦根市が77キロだったので、日本人的間隔で言えば、聖武天皇（在位７２４年～７４９年）の墓陵が鈴鹿市に造営されているようなものである。日本人は、鈴鹿市を「平城京の近郊」とは絶対に呼ばないし、参道10キロだけでも、平城京から現在の生駒市まで抜けてしまうだろう。

サーサーン朝ペルシア帝国のケースに引き比べると、日本人読者には分かり難くなるかも知れないが、帝都クテスィフォン（現在のマダーイン）とバグダードの距離が約40キロ、クテスィフォンとバビロンの距離が約50キロである。都市国家が分立する形態をとるメソポタミアの地理感覚の中では、やはり遥か彼方である。尤も、サーサーン朝ペルシアの皇帝陵墓としては、そうではないかと推定されるシャーブフル１世（在位２４０年～２７２年）のガーレ・シャープール（ビーシャープール近郊）しか残っていないので、正確には比較のしようがないのだが。

ゾロアスター教時代のイラン人には遺体崇拝の思想が無いばかりか、そもそも遺体自体を曝葬してしまうので、後に残るは遺骨処理の施設だけである。イラン人が遺体（正確に言えば生前の本人が纏っていたオーラの残光）を崇め始めるのは、イスラーム期に聖者崇拝が確立してからである。とすると、亡命イラン貴族の目には、中国の皇帝陵墓は余程奇異に映っていたか、さもなくばそんなことに莫大な富を消費する唐朝の富強に感じ入っていたかである。

この乾陵は未発掘である為、代わりに３００以上ある陪塚の１つ、永泰公主墓を見学した。ここは、地下数十メートルの下に掘られた墓室に、所狭しと壁画が描かれ、俑（人形）が置かれ、永泰公主が死後も地上の生活を続けているかのようだった。なお、永泰公主は、祖母の則天武后が男妾と戯れているのを批判したら、17歳の若さで祖母に撲殺された孫娘である。このあたりの感覚は大陸風で豪快である。おまけに、この墓には、盗掘した人間が盗掘品を地上に運び上げたあと、仲間に裏切られて生き埋めにされた遺体も眠っていたそうである。更におまけがあって、永泰公主の遺骨は、１３００年の時を経て回収されたものの、文化大革命の際に紅衛兵によって燃やされてしまったとのことだった。永泰公主も、祖母に撲殺された後、陵墓の中で盗掘者の遺体と一緒に数百年間眠り、挙句の果てに紅衛兵に燃やされようとは、思わなかっただろう。

ただ、この豪奢は、無関係な日本人研究者だからこそ、素直に感心していられる性質のもので、いにしえの中国人民の血税でこれが造営されたとなると、隣で中国人の同僚の怒りが爆発していた。太古以来（大袈裟だと思うが）、中国は税制も不備ならその使途も出鱈目だとか。現代中国でも、国民１人１人の所得を正確に把握するのは無理で、ほぼどんぶり勘定で課税されているらしい。そうすると、共産党幹部やその親戚には課税されず、非共産党員に重く課税するなどの不公平が起こっているとのこと。そして、そのようにして得た税収は、過去に於いて皇帝陵墓の造営に費やされたが如く、現代では無意味なアフリカ投資に当てられていると一刀両断にしていた。しかも、その投資計画が杜撰過ぎて、おそらく原資を回収できないと予想されている。中国の国威発揚の為に、随分無駄な金を国際社会にばら撒いているのは、人民の立場として許せないらしかった。

日本人のイラン研究者としては、過去の中国皇帝の墓陵に怒りをぶつける気は無いし、現代中国の税制や海外投資など知らないので、昼食に西安名物の岐山麺を食べながら、サーサーン朝との比較を考えてみた。（因みに岐山とは、紀元前１０００年頃に周王朝が起こった地で、その頃から食べられている麺だそうである。本当かどうかは分からないが、夏場に食が進みそうな若干酸味のある麺だった。）一体全体、サーサーン朝には女性の墓陵があったであろうか？　無い可能性の方がずっと高いが、だとすると高位の女性は配偶者の合葬墓に葬られたのだろうか？　ヤズド

近郊にある2基の「沈黙の塔」は男性用・女性用とされるが、だとすると墓陵にも男性用・女性用があったのではあるまいか。思考は反転して、ゾロアスター教法の葬法における男女区別の有無を考え、サーサーン朝末期の女帝アーザル・ミードゥフトの陵墓「ガーレ・アーザルミードゥフト」を想像してみた。

21-3. 西安の研究所×4ヶ所歴訪

ここからは、２０１７年８月の西安調査に話しを戻す。筆者は、橿原考古学研究所の研究者たちと、ウルムチ・トゥルファン・敦煌を経て、西安へ到着した。しかし、途中の行程でロスにロスを重ねたが故に、西安では1日しか時間を確保できなかった。それにも拘らず、橿原考古学研究所の菅谷所長（当時）から、実に4通もの紹介状を御預かりしており、西安市内の博物館を片っ端から訪問することになった。

第1に、陝西省考古博物院へ。ここでは、北周時代（５５６年〜５７９年）に漢代長安の東、隋唐代長安の北に造営されたソグド人墓＝安伽墓の墓碑銘の実物を拝見した。確かに、研究史上有名な「薩宝」の文字を確認できた。ついでに、秦の始皇帝の兵馬俑の実物何体かが保存されていたので、鼻先10センチの距離で見せて頂いた。博物館に行っても、これほど近距離で本物を拝めることはまずあるまい。紀元前3世紀の作品とは思えないほど写実的で、彩色まで施されていた。

第2に、陝西省歴史博物館へ。ここでは、最前の安伽墓のレリーフを拝見した。何故、同じ墓の墓碑銘とレリーフが別々に保管されているのかは分からない。駱駝の上に乗った拝火壇と、上半身人間で下半身鳥のゾロアスター教神官の特異なレリーフを堪能した。前者については、筆者はソグド人商人専用のポータブル拝火壇なのではないかと思うのだが、今のところ確証がない。

第3に、西安博物院へ。ここでは、北周時代に漢代長安の東、隋唐代長安の北に造営されたソグド人墓＝史君墓の碑文＋レリーフがセットになった実物を拝見した。こちらは、墓主の生涯とゾロアスター教の信仰が絵巻物風にレリーフ化されており、大変見応えがあった。既に夏休みに入っているとかで、館内は小中高校生の修学旅行客で溢れ返っていた。中には、浙江省・杭州から来ている高校生たちも居て、「鉄道で8時間の旅だった」と言っていた。

最後に、碑林博物館へ。ここでは、長安出土の中世ペルシア語・漢文2言語碑文の拓本と「大秦景教流行碑」の実物を拝見した。前者は、１９６４年に伊藤義教氏が解読した有名な碑文。まだ国交がなかった時代のことなので、本物を見るには至らず、写真を元に解読した論文であった。今回、筆者は世界に20部しかない拓本をつぶさに拝見し、写真まで撮らせて頂いた。

この後、明代城壁の外に出て、唐代の西市の遺跡に作られた長安テーマパークを訪問した。唐代の長安には、官庁街の中にある東市と、外国人街の中にある西市があり、そのうち後者が復元されていた。更に、唐代西市の遺跡の傍に個人が作った西市博物館を訪れた。ここの陳列物は「唐代西市」に焦点を絞っており、筆者にニーズにマッチした。即ち、唐代長安城の西門を「開遠門」と言い、ここがシルクロードの出発点なのだが、この門の傍の「西市」こそは、ソグド人商人が軒を連ねる国際市場だった。当然、「西市博物館」には、ソグド人やゾロアスター教所縁の出土品が多く展示されており、しかも筆者にとって未知の品々ばかりであった。

＊　＊　＊

筆者は、唐朝文化の本質的な部分に、北方遊牧民文化のみならずイラン文化・ソグド文化が大きく影響したのではないかと考え、西安を訪問させて頂いた。旅を終えてからの心残りは、筆者の観察が皮相に流れ、捉えるべきものを上手く捉えられなかったのではないかとの一点である。

具体的にいえば、唐朝が西域文化を導入する際の突破口となった「仏教文化」に尽きる。この名称の下に一括して、実際には多様な西域文化――その中には、当然、イラン文化・ソグド文化が含まれる――が東アジアに流入した筈である。

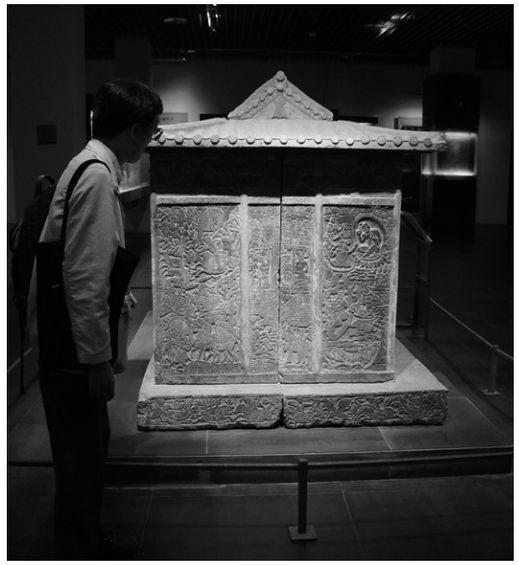
この点に関しては、近年、空海（７７４年〜８３５年）の師資相承上の先達に当たる不空金剛や般若三蔵が、唐朝宮廷でソグド人系の人脈の中にあったとする論考が発表されている。（中田美絵「不空の長安仏教界台頭とソグド人」、『東洋学報』89-3、２００７年、同「八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界」、『関西大学東西学術研究所紀要』44、２０１１年参照。）もちろん、「ソグド人＝ゾロアスター教徒」とは限らないが、その可能性自体は否定できない。ここに、「日本の真言密教は空海以前の段階でソグド系ゾロアスター教の影響を蒙っている」と論じる余地が生じてきたように思われる。また、空海は最澄と異なって、最後まで南都仏教界と良好な関係を保ち、その由縁もあって高野山に金剛峯寺を築いたとされる。（高野山金剛峯寺は、京都よりも南都を意識した立地である。）今後の「イラン文化＝長安＝奈良」を結ぶ研究上の主軸は、「長安のソグド系人脈＝不空金剛・般若三蔵＝空海・真言宗＝南都仏教界」として追究されるべきかも知れない。

（以下、次号）

開遠門前のソグド人キャラバンの彫刻

上半身人間で下半身が鳥のゾロアスター教神官のレリーフ
於陝西省歴史博物館

安伽墓のレリーフ　於陝西省歴史博物館



史君墓の碑文＋レリーフ　於西安博物館

大秦景教流行碑　於碑林博物館

あおき・たけし
1972（昭和47）年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士（文学）。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教』（講談社選書メチエ）、『アーリア人』（講談社選書メチエ）、『マニ教』（講談社選書メチエ）、『古代オリエントの宗教』（講談社現代新書）、『新ゾロアスター教史』（刀水書房）、『ペルシア帝国』（講談社現代新書）など著書多数。